

早川三代治 知性と情感の融合

講師 市立小樽文学館主幹学芸員 亀井 志乃

※傍線は引用者による

生ける地

（宝文館 昭和19年8月刊）

標茶村農会では年度末になつて管内の更正畑の成績を集計してみた。それによると、四百五十五戸四百八十一反の更正畑の収入総額は六千二百三十二円八十四銭で、反当収入八十二円九十五銭となつた。十四種にわたる作物中、反当収入の多いのは奨励作物であつて、大豆十八円八十銭、玉蜀黍十八円、大麦十六円、燕麥十四円五十銭、馬鈴薯十三円九十銭、甜菜十三円八十銭、最低の紅金時が二円四十銭であつた。総収入額六千二百三十二円八十四銭の用途は、備荒貯蓄五百八十一円五十四銭、備荒貯蔵八百五十三円五十二銭、旧債償還千四百七十八円、家畜購入千九百十九円四十五銭、家具購入二百一十円四十銭、農具購入五百六十五円四十銭、婚礼仕度三百三十四円五十銭、住宅改良五十一円四十銭、自家消費千三百円六十三銭、献金二十七円であつた。

この数字は標茶村農会から釧路国支庁へ報告された。村役場や支庁では予想外の好成绩で参加農家の生活改善の実を挙げたことが実証されたので未参加農家の羨望の的となつたから、今年は殆んど全部の農家が参加するものと考へて有頂天であつた。

（昭和12年度の標茶町管内更正畑の成績を記した箇所）

若い地主

（青年論壇社 昭和22年7月刊）

彼は机の上に、「水田畑小作元帳」、「金銭貸借帳」、「雑記帳」を取りひろげた外に、ボン神恵農場に関する書類の一束も見つけ出して来た。信吉はその晩から数日ばかりで抜き書をしながらボン神恵農場の覚え書きを作り上げた。

それが出来上がると彼は思はず深く嘆息せずにはゐられなかつたほど、その覚え書きは人の力によつて耕作される土地の持つべきあらゆる種類の歴史の交錯であつた。然も、簡単な項目と数字との羅列にすぎない幾枚かの紙面の上にその歴史が苦悶の声を挙げて叫んでゐるやうに感じられた。（中略）

「この土地をなんとかして救はなければならぬ。これまでのやうに無関心であることはあつてはならぬ。」信吉はさう強く感じながら彷彿と心に浮んで来る此の土地の全貌と歴史を熱した頭で練りかへし吟味しやうと努めた。

パレート法則の研究

〔早稲田大学新聞〕昭和35年5月25日

西欧で学んでいる間にも私の胸中を占めていたのは「経済学法則」に関する研究であつた。経済学を法則科学として見るかぎり、一方では一般に経済学法則の認識論的方法論が要請されると共に、他方では現在、経済学法則と呼ばれている諸法則の内容的吟味が必要であると私は考えた。そういう理由から私は色々の経済学法則の研究への関心を深めて行つたが、就中、私の興味をひいたものの一つに、所得配分のパレート法則があつた。私はこの主題に着手するについて、先づ最初に文献上の研究、次いで方法論上の考察を考へて我邦の資料についての実証的分析という段階を辿つて来た。こういう問題への接近の仕方は、今からふりかえつてみると、青年時代に札幌で親しんだ自然科学的見方がいつの間にか私の身についてしまつたのかも知れない。

シユムペーター先生の追憶『緑丘新聞』第217号 昭和25年2月10日

一九二四年の初夏にローマ半歳の滞留をきり上げて、ウインに来て間もなく、私はシユムペーターがウインに居住していることを知って、面会を乞う手紙をさし出した。

数日たつて、返事があつて、面会日と場所を指定された。そこは私の宿から近いビーデルマン銀行であつた。

私は何んでも、十四、五位も質問の材料をとりまとめて銀行へ訪ねていった。階上の広い部屋に通されると、そこは銀行頭取の事務室ではなく、学者の書齋そのものであつた。中央のテーブルの上には、経済学書や専門雑誌が山積していた。一番上には英国のエコノミックス、ジャーナルが数冊置かれてあつたのは印象的であつた。

私が自己紹介として、三学期間ボンでドイツエル、シユピートホフ、マンステツド三教授の講義を聴いて来たということを述べると、シユペーター先生の態度は初対面のかたぐるしさは微塵もなく長年の知己のように打ちとけて、今のオーストリアには理論経済学を志す学生はほとんどいないと嘆息し、私の幼稚な質問に懇切を極めた解答を与へてくれた。

それは快刀乱麻を絶つような明確さであると同時に後進学生に対する温情親切のこもつた説明ぶりであつた。

喪の休戦記念日『教育建設』北海道教育文化協会 昭和22年9月25日

私の宿の人たちは、女中のマリアをのぞいて、みな一日中、家にひきこもつていた。しかも、みな、無愛想ではないが、ひどく無口であつた。マリアは一日の休みをもらつて、田舎で農家をしている自家へ行つた。中風症で半身不自由の主人ゲハイムラート・ベルグマンは昼食後から、応接間兼食堂で安楽椅子にうずもれて、ビュウロウ公の回想録を読みながら、時々、居眠りをしていた。半ば白

髪になつた主婦のベルグマン夫人は、女中のいない台所に立ちはたらき、老母の手助けをしている娘のエリザは、もう三十二歳の老嬢であるが、長い戦争中の栄養不足のためにすつかり健康をそこねてしまい、同時に青春をも失つて、蒼い皮と骨ばかりになり、編み物と靴下のつくるいに時を費してゐた。市役所に勤めている息子のオットーは、戦争で負傷した右手の人さし指が内側へくの字なりに固く曲つてしまつた手で、それでも結構小器用にピアノをひくのであるが、きょうは国民の喪の日だと言つて、ピアノの蓋を開けようとしなかつた。

ラインの人々 一、雪鐘草

『新樹』大正15年1月

宿の娘さんと下宿人の文学士と私との部屋が相隣り合つてその家の三階にあつた。夜中に一二度階段を上る足音と娘さんの部屋に出入りする物音とが眠りの深かつた私の耳に微かに残つてゐた。翌朝遅い朝の茶を階下のサロンで独りで喫してゐると、女中がおどく／＼して這入つて来た。

「御嬢さんが、もういけないんです」

「と云ふのは？」

「神様の許へ」

私の顔をぢつと見つめてゐた女中は、目を伏せて睫毛をしばたき、声をおとした。私は口にくんでゐた微温なまぬるい茶をぐくりと咽喉にやつと通した。

「私には一寸も様子が解らないよ、マリア。云つて御覧、一体、どうした事なのか」

「妾わたしにも解りません！ 夜中に奥様が妾わたしを呼び起された時には、もう御嬢さんは苦しい呼吸をしてゐられました。」

「二三日前に風邪を引いたがもうよくなつたと云つて昨日の朝には起きて来られたつけね。」

「そうですね。それから午後には庭に出て、雪鐘草を摘んでゐられました。」

「そうそ、あの雪鐘草だつたつけ。」

静かな街に沿ふた窓辺に近く小机が据えられ、華細な卓布の赤いローゼンタールの小瓶には純白な雪鐘草が微笑してゐる。

(中略)

伝言(※伯母という人に危篤の報を伝えた)を終つて伯母よりも一と足先きに戻つて玄関へ這入ると、恐ろしく緊張した顔のマリアが其処に棒立ちに突き立つてゐた。

「どう?」

「死なれました。」

痛々しくマリアが泣き出した。私は静かに階段の上の方を仰いだ。

もう暗かつた。そつと庭に出て見ると、暗い私の部屋の窓の隣りに、燭灯に照されて明るい、娘さんの死の部屋があつた。二つ三つ、淡い影が其処に動いてゐた。足もとの、冬から春へとやつと甦りかけた地面に、雪鐘草の花が咲いてゐた。微かに、いぢらしく、淋しく咲いてゐた。

流れゆく心臓(中)

『北海タイムス』大正14年3月4日

私は故国から持つて来た、私の心を、どれ丈始末し得たでせう。何も持つて来ずに、而して、何も得ないで終つた様に思はれます。心の内に、何か握つて来いと、さる先輩は私に 餞(はなむけ) けてくれましたが、心の内に何が、しつかりと握られたでせう。

(中略)

羅馬ではO博士からこんな物語りをききました。英国の或詩人が海で死んだ時に、彼の心臓だけが波にもまれて海岸に打上げられたと云ふ事です。それは、バロンに関する物語りでしたらうか。

そんな不思議な物語りがあるものでせうか。仮に、あつたと致しませう。私がもし、そんな不思議に合ふとすれば、私の心の臓は一體、何処へ流れつくでせう。

生ける地(既出)

秋田さんが日頃接してゐる農民たちは、いくら、慾目に見ても、屯田兵魂なぞの持ち主ではなかつた。秋田さんに言はせれば、開拓の初期に北海道の土地を開墾した大部分の人たちとても、彼等の生活のために、貧困から抜け出たいばかりに、露骨に言へば、自分の口が可愛いばかりに、身を粉にして働いたのであつて、何にも観念的に最初から屯田兵魂を持つてゐたわけではないと考へていた。

(中略)

秋田さんは、むしろ反語的に、塩田、山部、津田などの老爺たちの、黙々として土を耕し、凶作に喘ぎながら、なほも、じつくりと土地にかじりついてゐる、普通の、百姓の、ありのままの気持が、いぢらしく可愛く思はれた。お前さんたちは屯田兵魂をもつてゐると言つてきかせたら、この老爺たちは、びつくりし、歯ぐそだらけの口を開けて、困つた笑ひをもらすであらう。「おらは、生きてたいから土を耕して作るので、それまでのことだよ。」

と老爺たちはそつげなく言つてのけるだらうと秋田さんは考へてゐた。

(中略)

それから(小西)先生は話をかへて言つた。

「この頃、僕は虹別の歴史を書いてゐるんだよ。役所の記録や偉い英雄の伝記なんかではなくて、虹別そのものの歴史を書かうと思つてね。簡単に考へれば、虹別の歴史は昭和四年の春の移民入地から始まるとも言へるが、併し、ほんとうは、悠久と言つてもいい前史があるんだ。僕はこのことを思ひついたのは、帰還した後で北方農業といふ雑誌を読んで虹別原野のこと、殊に原野の土質のことを知つてからだよ。新しい原野の土地に歴史がないと思ふのは大変な間違ひで、恐ろしいほど長い過去の歴史があるのだよ。僕は先づそれを書いてゐるのだよ。これが出来上つたら郷土読本として君たち(※若い帰還兵)にも読んでもらはうと思つてゐるよ。」

と小西先生が言つた。

海路から小樽にはひつてくる海員たちの荒々しい言葉の中に聞えたところによると、彼等は小樽を「穴」と呼んでゐる。それにはいろいろの意味や隠語を含んでゐるのであらうが、小樽の持つ自然の地勢は、海上からの眺望者にかういふ感じを与へるのであらう。正面の天狗山を中心に、左方、南東に連なつてゐる毛無山、朝里山、熊碓岬、右方、西北に伸びてゐる松山、石山、赤岩、高島岬によつて屏風のやうに東南から北へと取りまかれ、僅かに北東の一部が石狩湾に臨んで口を開いてゐる地勢は、海からくるものに全く「穴」のやうな印象を与へる。私も一度その印象を確かめたことがある。

(中略)

そこには札幌の開設のやうな計画は見られなかつた。港湾と鉄道との二つの交通によつて、富の自由な通路として、人間の商業的才能を奔放なまでに発展させる舞台となつたのがこの土地である。

(中略)

小樽の街はかういふところに造り営まれてゐる。地勢の複雑さに加へて、ここに住み生きる人々もまた、雑多である。それぞれ異なつた郷里から生活をここに移植した人々の子孫によつて作られてゐる街のこととて、ここに根をすつかりおろした家でも、遠くに遡つてやうやく三代目くらゐの人々である。しかし、街としてはすでに一つの色や味といふものを作り出してゐることが感じられる。

(中略)

小樽に一時の僑寓を持つ勤人たちが、表面のがさつな感じに似ず、内面の人なつつかさをこの土地の人々に見出すといふこと、案外棲みよい土地だといふこ

とも、あながち通り一ぺんの空お世辞ではないやうである。これがこの「穴」のやうな海港都市の持つ味、そこまでこの土地に住む人人によつて作り出されてきた生活の稔りであらう。

小樽は私にとつて生まれた土地であり、死ぬ土地であらう。生地であり、墓地であらう。それ故にこそ私の故郷なのである。私の日頃の散歩の一步一步は、私にこの土地の精魂を暗示し、或は啓示してくれる。小樽はあらゆる意味で、私の養ひの土地である。